

# 占領期生活世相誌資料Ⅰ

敗戦と暮らして

史資料集の書評はむづか「戦」「暮らして」である。しい。その編者は間違いないく、あるいはおそらく、そこ収録した史資料だけでなく、それらを含む膨大な史資料群の全体を見渡し、それらを精読し、選択し、編集し、解説を執筆して史資料集を作ったのだから、その作業をしていないわたしは評者に不資格である。また論文や著作の批評ならば、その著者を相手とする組打ちをするわけだが、史資料集に収録された記録の書き手との乱取りとなるなど、これはしんどい。

## あらためて考えてゆくきっかけに

「占領」と「占領期」、「生活世相」と「生活世相誌」

阿部 安成

着目するのであれば、こうした言葉の用法や用例に注意を払いながら、どういったときに、戦争が終わった／戦争に敗れた、とどちらえられたのか、感じられたのかをつかむ必要があるに思う。政治をめぐる心情や立場とほべつに、あるいはなんの気なしの乱用ではなく、史料の記述に即して、「終戦」「敗戦」「占領」をめぐる論を立てられるはずである。

本書に巻かれた帯には、「地方誌・民衆誌の読み解きから、占領期の生活・世相の実態がいま、リアルに蘇る」とある。この一文は、収録記事の読みどころが「実態」「リアル」「蘇る」にあると唱えている。第一章解説にも「実態」の語が多用され、プラング文庫の雑誌資料を「人びとの生活のディテールが生き生きと浮かび上がってくる」と評している。

だが、収録記事にみえる原爆被害についての「本爆弾は七十五年間は有書で人畜は住むことができない」という予測が現実とならなかった展開と同様に、広島での「全市が一瞬にして潰滅した事」もまた実際のようなとは異なっていた。当時そうした実態があったことと被害の実態とは、別とみたほうがよいはずだ。収録記事をふまえた「敗戦・占領」という現実も踏み台にして、苦難の時代を生き抜いていったのである（第三章解説）との理解も記事の素朴な転用にみえる。激動の二〇世紀中葉を生きた人びとが書いた記事なのだから、そこに生きた軌跡があらわれているのは当然である。

「上『前期生活世相誌資料』と題された本書は、「米メリーランド大学図書館のグロッドン・W・プランゲ文庫に所蔵されている雑誌の記事を精選し配列したものである」と、これはしんどい。

このシリーズは、「占領」と「占領期」、「生活世相」と「生活世相誌」とを、それらの見方や論じ方とあわせて、もういちどあらためて考えてゆくきっかけになる。（あべ・やすなり氏 滋賀大学教授・近代日本社会史専攻）

★やまもと・たけとし氏は早稲田大学・一橋大学名誉教授・インテリジェンス史専攻。著書に「GHQの検閲・諜報・宣伝工作」など。一九四〇年生。

★ながい・よしかず氏は関西大学教授・都市社会学・大衆文化論専攻。著書に「南沙織がいたころ」など。一九六〇年生。



A5判・368頁・4500円  
新曜社  
978-4-7885-1402-7